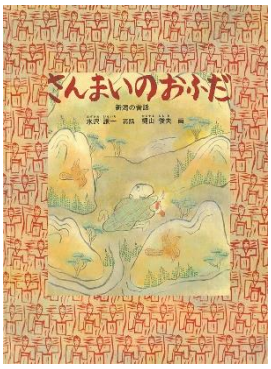
# 絵本から学ぶこと②

６月のコラムでも絵本の面白さを書かせていただきましたが、絵本から学ぶことはたくさんあるので今回もご紹介させてください♪




**【さんまいのおふだ】**～あらすじ～

ある日、和尚さんに裏山で栗を拾ってくるよう頼まれた小僧さん。「やまんばがいるから行かれない」と断ります。すると「山姥(やまんば)が出たら、これを使え！」と３枚のお札を渡されます。栗を拾っていると暗くなり、そこへ一人のおばあさんが「ウチへおいで」と声を掛けてくれ、小屋に泊まることになりました。
それが実は山姥(やまんば)で、小僧さんは和尚さんにもらった３枚のお札を使ってなんとか寺に逃げてくることが出来ました。
和尚さんは追いかけてきた山姥に「術比べをして山姥が勝ったら小僧を渡す」と約束し、上手く術で小さくなった山姥を、餅にくるんで食べてしまい、めでたしめでたし…

ここでの登場人物は、　①山姥　　②小僧　　③和尚　の３人。
実はこの３人、家庭内の「母親、父親、子ども」の象徴として見ることが出来ます。

①山姥（母親の象徴）→小僧が寝た時、頭やおしりを撫でて可愛がる＝愛情表現。
②小僧（子ども）→小僧は自立したい、母から離れたいのに母が追ってくる。
③和尚（父）→子どもを守り、父は子どもを自立させ俺のところに戻ってこいよという愛情表現
お札による３回の試練は、「第１反抗期・中間反抗期・第２反抗期」を意味しています。
そう考えると、山は「親の無意識の世界」となり、山姥は「親の否定的力」と置き換えることが出来ます。つまり、子どもを自立させるためには、親も子どもから自立する必要がある、とこの話は諭しているのです。

子どもが親から精神的な自立を果たすには“親との対決”が必要です。
親の言うことなんて素直に聞かないのが「反抗期」ですね。
前述のように、反抗期は成長過程で３回起こると言われています。
１回目は、いわゆるイヤイヤ期
２回目は、小学校低学年ごろの中間反抗期
３回目は、反抗期の象徴としても知られる思春期です。

私達も大なり小なり反抗期を通ってきたのではないでしょうか。
一過性のもので、時間が経てば自分自身も成長して、そんなに尖らなくなりましたよね。(笑)
子どもが新しい距離感を獲得し、親子関係の再構築を行う間、親も自分の時間の使い方を見直す（自分の気分を軽くする）といいと思います。
いずれ訪れる子どもの自立（親の「子離れ」）を、楽しみながら迎えましょう。
『さんまいのおふだ』いかがでしたか？
絵本の見方を変えることで、学びや子育てのヒントがあるかもしれないですね。　　（本間）